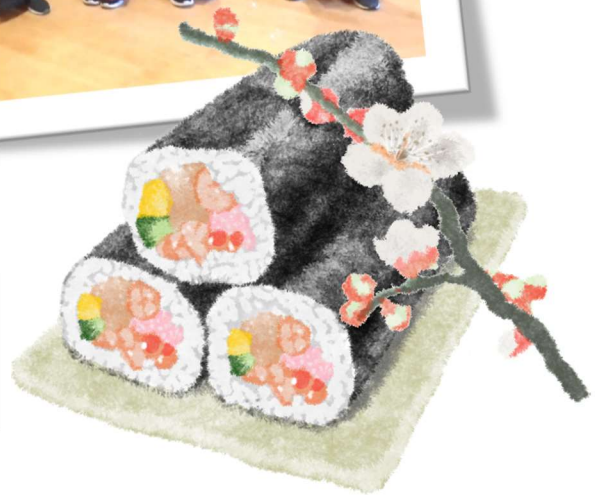


verde

「verde」とは、ポルトガル語で「緑の」という意味です。



ベルジ箕輪

ベルジ株式会社 有料老人ホーム ベルジ箕輪

発行責任者 総支配人 守田 昌史
支配人 高木 正幸

〒370-3104 群馬県高崎市箕郷町上芝 839-4
Tel 027-371-6610 / Fax 027-371-6613

E-mail minowa@e-verde.co.jp
URL <http://www.e-verde.co.jp>

(ホームページにてブログも更新しております。そちらも是非ご覧ください。)

1月の出来事



龍神様

お正月には繭玉を飾られる方も多いと思いますが、まゆ玉や餅花には、養蚕や豊作を祈る意味が込められています。養蚕の産業で群馬は栄えましたが、残念ながら今は繭玉が手に入りにくいので、まゆ玉ではなく紅白の折り紙の鶴、そして龍を枝にあしらいお飾りにしました。数年前は施設でも皆さまと紅白の団子をこしらえて、枝に飾り、風習としてのお正月行事を楽しんでいましたが、感染症であったり、手に入らないなど、不測の事態で出来なくなることが、このまま忘れられてしまう文化になってしまうのではないかと危惧してしまいます。伝承こそが、

新年を飾る段ボールアートは龍神様。身長180cmほどの職員でも覆いかぶされるほどの大きな龍神が現れた際には、「よ〜く出来るわねえ〜」と、まるで神社に奉られた神仏を見るように感嘆の声を漏らしながら眺めていらっしやいました。龍神様のご神体には皆さまの願いのお札が貼り付けられ、今年の開運を祈願。元旦の天災に心が痛みますが、ベルジ箕輪の皆さまは龍神様がお守りくださいました。



お正月飾り

皆さまからバトンを渡された私達の役目でもあるので。

お正月の文化、その式はお屠蘇です。お屠蘇はその年一年の無病長寿を願い、お正月に飲む特別なお酒です。関東や東北では日本酒をお屠蘇の代わりに使用するのが一般的かと思いますが、お屠蘇は屠蘇散と呼ばれるいくつかの生薬を調合したものを、日本酒やみりんに漬け込んだ薬草酒が元々のお屠蘇なのだそうです。お屠蘇を飲む前には、必ず若水という元日の朝に汲んだその年初めての水で手を清め、神棚や仏壇を拝み、新年のあいさつが済んで、おせちを食べる前に飲むという作法があります。また、飲むときには、「一人これ飲めば一家苦しみなく、一家これ飲めば一里病なし」と唱えて、無病長寿を願いながら飲むのだそう。今年はずっとお屠蘇気分でいられるような、穏やかで、のんびりした一年になりますように。胸の中で唱えながら皆さまにお酌させていただきました。



お屠蘇

日本の文化、その参は獅子舞。日本のお祝い事には欠かせない“獅子”の頭を被り唐草模様の胴幕を付け、祭囃子に合わせて舞い踊る民俗芸能。悪魔払いや疫病退治を願って舞われ、獅子舞に頭を噛まれると神がつく(噛みつく)で縁起がいいとされています。獅子舞に扮装した看護スタッフが無病息災、疫病退散の気持ちで一日の体調を確認。「いい着物だね」ひっひと笑う皆さま。笑いは副作用のない妙薬、沢山笑って健やかな一年に。



獅子舞



最近では飲む点滴といわれ、夏でも冷やした甘酒をいただくことが当たり前になってきましたが、昭和の頃、甘酒は冬の飲み物で初詣でやどんと焼きで、冷えた身体を温めた思い出があります。お砂糖で甘いのに、ほんのりと父が飲むお酒の匂いが鼻に香り、子供心に大人の飲み物をいただいて良いのだろうかともごまごましていると、祖父に薬だから飲みなさいと笑顔で差し出されたことを思い出します。林檎のような真っ赤な頬っぺたが甘酒のせいなのか。寒さのせいなのか。凍てつく空気で息が煙のようになる中で、握ったホッカホカの甘酒をフウフウとしながらいただいたそんなことを思い出しました。

甘酒

ミャンマーの新年を迎える伝統舞踊を特定技能実習生が披露。ミャンマーでは水をかけ一年の不幸やけがれ、厄を払い新年を迎えるという水かけ祭り『ティンジャン』をするそうです。「今日踊りが見れるんでしょ!」と、とても楽しみにしていたご様子の皆さま。衣装に着替える前の実習生に「日本でいうとこの盆踊りのようなもの?」と聞いてみましたが、盆踊りが分からなかったのか、ただ微笑んでいました。いざ踊りが始まると聞き馴染みのない異国の音楽と民族衣装を着た実習生に皆さま啞然。アンコールで2度目の舞踊になると、真似て手を動かしたり、手拍子をされたり、楽しまれていました。東南アジア独特の身振りで表現する舞踊、フラダンスとも違うアンニュイさ、日本の風の盆の踊りにも少し似ているかも。みんな元々美人なのだけれども「キレイね」と皆さま。これぞ、ベルジ箕輪の奉納舞でした。

奉納舞



みのわ情報



福

節分飾り

節分の人形を飾りました。ユニークな鬼の表情や仕草にほっこりしますが、鬼は人の心に住む煩惱のシンボルとされており、赤鬼は欲望、青鬼は悪意、憎悪、緑鬼は墮落、黒鬼は疑い、愚痴、黄鬼は甘え、自己中心的などと言われています。自分から追い出したい煩惱を表す色の鬼に豆をぶつくと良いとされていますので、「鬼は外」する際には色にも意識してみてくださいはいかがでしょうか。

皆さまが好きな献立不動の一位のお寿司。ひと昔前までお寿司は、お祭りや誕生日など人が集まる特別な日、ハレの日にしか味わえないご馳走でした。今は多くの企業努力によって手軽な食事のひとつにもなりましたが、食卓にお寿司が彩を添えると、やっぱり「今日は御馳走だね」と言ってしまいます。



お寿司の日

* 編集後記

鬼の人形を並べ、その愛らしさに癒されましたが、鬼の肌の色について昔の人はどう思っていたのでしょうか。今は多様性を認める時代、アニメの影響もあるのか髪の色が桃色であろうが銀色であろうが特別な事ではなく、近い未来では肌の色が緑だろうが、青だろうが、姿が人型でなくとも、肩を並べているようになるかもしれない話もあるので奇妙ではないけれど。時代が移り変わり、身の回りの物が変化し、価値観が変わっていくのは世の流れ。今どきの子は公衆電話が使えないのだとか。プッシュダイヤルが使えないならダイヤルを回す黒電話は、もはや電話ではないのかも。災害が起こり、街から消えつつある公衆電話に光が差し、井戸水のありがたみに人が手を合わせていました。整えられたライフラインが当たり前の私達から、電気・ガス・水道を取り上げられてしまうと、途端に生活が困難になります。電気が点き、蛇口から水が流れ、トイレを流すことができた時、なんと有難いことだろうと手を合わせました。お風呂に浸かれ、歯磨きができ、衛生が保たれることで日常がいかに快適であるかを実感します。知りたいことはスマホやネットに問えば概ね答えを教えてくださいますが、不測の事態の時に、電源を失ったスマホに知恵や助けを求めることができるだろうか。辰年の今年、辰に雨へんを付けると地震の「震」、『浅間のいたずら鬼の押出し』という浅間山の噴火を詠んだ札が上毛かるたにあります。そんな鬼を豆で追い払えるのか。けれど臆してはならない、手をつけると「振」、ふるいたち、すくう、たすける。人が手を取り合うことで、変えられる未来がある。「人を助けるのはいつでもやはり人なのです」住職の有り難いお言葉です。